

「特集」場づくりのその先へ——つながりから社会を変えていく」

「創発的な場」を生む仕掛けを どう育ててるか

「誰もがいたいようにいられる場所」をデザインする

対談

「東京都大学都市生活学部教授」
Sakakura Kyousuke

坂倉杏介

山納洋

「大阪ガスネットワーク株」
エネルギー・文化研究所長代理・研究員
Yamanoh Hiroshi

人と人がつながり、新たな何かを生み出すような関係性を育んでいく。そんな創発的な場。コミュニティをつくるため、私たちはどのように考え、振る舞えばいいのか？
それには、単なる場づくりだけでなく、生身の人と人が関わる実践に本質を探っていく必要がある。
東京都港区の「芝の家」や「三田の家」、さらに世田谷区での「おやまちプロジェクト」など、先進的な試みを通してコミュニティ・マネジメントを研究されている坂倉杏介さんにお話を伺った。

脇坂敦史「構成
栗原論「撮影

「おやまちプロジェクト」の活動の「場」となる、尾山台（東京都世田谷区）の駅前商店街にて。

山納 まず、坂倉さんがどう「場づくり」と関わるようになったか、教えていただけますでしょうか？
坂倉 大学では美術史を学び、就職して博物館や展示会の企画を手がける仕事もしました。でも今の「場づくり」と直接つながるのは、慶應義塾大学の大学院に戻って受けた熊倉敬聡「*1」先生の「美学特殊C」という講義です。そこで出会った4人で、2002年10〜11月に墨田区京島の元米屋の空き店舗を2カ月借り、「京島編集室」と名付けました。折から同地域で開催中のアーティスト・イン・レジデンス「*2」のイベント「アーティスト・イン・空き家2002」と連動する形で、制度的でも商業的でもない「オルタナティブ・ス

ペース」を目指したのですが、私以外は若い学部生ばかり。カフェやワークショップをやろうにも、やり方がわからない。
結局、事前に用意した考えもすべて手放し、とにかく寝袋だけ持って集まり「住んでみる」ことにしました。すると、近所の飲食店のおばちゃんが炊飯器を貸してくれたり、区役所の方が訪れて廃品がもらえそうな場所を紹介してくれたり、いろいろなことが起こりはじめる。やがて顔見知りも増え、いつの間にか海外のアーティストと犬の散歩途中に寄ったおじさん、近所の小学生まで一緒に食卓を囲んでいたり……編集室の存在が、つながりの失われていた住民の自発的なアクションのきっかけとなりました。それが、今に至る原点と言えるでしょうか。

関西の「場づくり」に憧れ 深い影響を受けて

山納 坂倉さんとは、実は2000年代の半ばに初めてお会いしているんですよ。

坂倉 そうなんです。当時は熊倉先生を通し、関西の動向に興味を

もっていました。京都のアーティスト集団「DUMB TYPE」のメンバーだった小山田徹「*3」さん（現・京都市立芸術大学教授）が立ち上げた「アートのスケープ（吉田山）」や「ウィークエンドカフェ（京都大学YMCA地塩寮・会館）」、そして「バザールカフェ」「*4」につながる動きにも憧れていました。当時の東京には、そういうものがなかったんです。

「京島編集室」の経験から、サービスマネジメントを設計するだけの従来のやり方とは違うものに可能性を感じました。慶應義塾大学三田キャンパスのまわりでもできることはないかと思い、2006年に始めたのが「三田の家」（2013年閉家）。まさにその頃、大阪の應徳院「*5」や「バザールカフェ」、そして山納さんが手がけた大阪市北区中崎町の「common cafe」も訪れているんです。その時に、日替わりでキッチンを共有するマニュアルを見せ

てもらい、お話も伺いました。
山納 私は、小山田徹さんの、阪神・淡路大震災で被災した方たちが暮らす南芦屋浜復興住宅に屋台

を引っ張っていき、即席の「茶呑み場」をつくって人々をつないでいく活動に、大きな可能性を感じました。もうひとつのきっかけは、大阪市北区の堂山町で閉店するバーをなんとか残すために人を募り「日替わりマスター」をやったことです。そうした経験を経て04年に始めたのがカフェ空間をシェアする「common cafe」で、カフェとしての機能をベースに、より間口の広い「表現の場」をつくりたいという意図もありました。
坂倉 山納さんの「日替わりマスター」のアイデアを含め、大阪や京都に息づく「場づくり」のふくよかさ、緩やかさを「三田の家」の運営でも参考にさせてもらいました。
山納 私の方は、10年ほど前に「芝の家」を訪れたときのことから印象的です。『つながるカフェコミュニティの（場）をつくる方法』（2016年、学芸出版社）という本の準備で関東方面のコミュニティカフェ取材していたのですが、場づくりの意識が低いところが多く、がっかりしていました。しかし、最後の望みで訪ねた「芝の家」だけは、居合わせた人が



上/外と内をつなぐ縁側のある「芝の家」の「しつらえ」。下/座る場所はまちまち、子どもから高齢者まで自由に過ごせる空間。写真提供/芝の家



「ここは知らない人同士でも話をする場所です」と声をかける、優しい自然な流れがあった。「何かが違う、何がどうなっているのだろうか？」と、坂倉さんにいろいろ教えていただきましたね。

**そこにいる人すべてが、
いたないようにいられる場所**

山納 「三田の家」では、大学の教員の方が日替わりマスターになったのですか？

坂倉 専属のスタッフは雇えないけれど、週1回ずつ担当を決めて誰かがそこにいればオープンということにしよう、と。ある先生が「三田の家」で学会誌を読んでいたら、教え子がひとりいて、その子は編み物をしていました。そう、「家族かよ!」と笑っていましたが（笑）、まさにそこは「家」でもあった。授業やゼミが終わるとご飯と一緒に食べ、シンクで皿を洗ったりもする。そういうときに話す内容は、教室とはずいぶん違う質感があります。

山納 その後につくられた「芝の家」は、港区芝地区総合支所と慶應義塾大学が協働で運営しておら

れます。先ほど「コミュニティカフェ」と言いましたが、単なるカフェにとどまらない。人々の居場所であり、コミュニティづくりの拠点ですね。

坂倉 プライベートな「三田の家」に比べ、「芝の家」は公共事業の性質が強いので、同じではないけれど、「そこにいる人が、いたいようにいられる」を大切にするといい点で共通しています。

山納 小山田さんと熊倉さんが2000年に行われた対談の折、「コミュニティのお茶呑み場」といったまさに先駆的な言葉でコミュニティカフェの可能性を語っておられるのですが、そうした試みが2000年代後半から本場にどんなに一般化したか。

坂倉 規模は小さいけれど多様な人が集まり、ひとつの機能やサービスの提供にとどまらない多様な使われ方がされ、自分らしさを発揮できるような関わりを通じ、いろんなことが起こってくる場所。「芝の家」が軌道に乗り、各方面から注目されるようになった頃、さまざまな領域で同じようなことをやっている人たちがいることにな

が上がりました。

山納 チェックインはそれぞれが「今の気分と体調」を分かち合い、その場にいるメンバーがオープンな気持ちになる。チェックアウトはその日の経験を共有して、坂倉さんの言う「場の文化」をつくっていったのだと感じます。

そして最後に「くわだて」ですが、「芝の家」では、すぐに大掛かりなイベントを思い描かず、誰かが何かをやりたいとして、たとえば手描きのチラシづくりなど、今できることからやってみる。「こんなことやりたい」という偶然の思いつきも「出来事」のひとつとして捉え、そこを出発点に次のステップへつなげていますね。

坂倉 ソーシャル・イノベーションやサステナビリティの分野で有名なイタリアのエツイオ・マンズイーニ*6の著作には、「どうすれば、その人たちはダンスホールにやってきて一緒に踊り、その後で話を始めるのか?」といった問いがあり、まさにそれだと膝を打ちました。単に「友達になつて」「つながって」「コミュニティになつてください」と言われても

気づきました。リースクールとか、福祉系でいうと「宅老所」のような場所とか。

山納 小山田さんや熊倉さんなど、アーティストだからこそ、つながりをつくることもアートと捉え、その重要性に気づくことができた。その後の四半世紀、社会の中でそれが方法論として共有されつつあるのを感じます。

**「しつらえ」「きりもり」
「くわだて」をデザインする**

山納 計画がないのに何かが起きる。「芝の家」を訪れ、その自然な時の流れに感動しました。今も不思議なのは、あの場所を港区という行政体がつくったことです。

坂倉 芝三丁目目は再開発で取り残された下町の雰囲気がある街区です。この地域ならではのコミュニティの問題を解決する拠点づくりとして、行政の担当者が最初に考えていたのは、昭和の遊びが体験できる、もう少し典型的な「公共施設」でした。

でも「お客さん」を呼び、何かを提供するような場をつくっても、コミュニティにつながりを増やし、無理で、そういう直接に操作できないことを、人々が安心してできる環境をどうつくるか? 私たちが試行錯誤してきたのも、そういうデザインだったと思います。

**「近い関係」の再発見が
地域のケアにつながっていく**

山納 港区の事業では2013年から、定員20名で約5カ月にわたり実践的な地域活動に取り組む「ご近所イノベータ養成講座」も行われ、地域活動を進めるための「ご近所ラボ新橋」*7もある。こうした独特なコミュニティづくりの方法論にも、一貫して「しつ



カフェ、キッチンのほか、コワーキングスペース、プリンタや各種工作道具、ミシンまで備えた「ご近所ラボ新橋」。日替わりで複数のマスターが運営を担当して、種々の“部活”やイベントをコーディネートする。写真提供/ご近所ラボ新橋

主体的に地域と関わる人を増やしたいという、行政側の目的を果たすことにはならないのではないかと、そんな真剣な議論を重ね、とにかくオープンで、多様な人の思いを後押しする場をつくらうということになりました。

山納 訪れた人を単なるお客様にしない。ということですよ。最初から「あるべき姿」は見えていたのでしょうか？

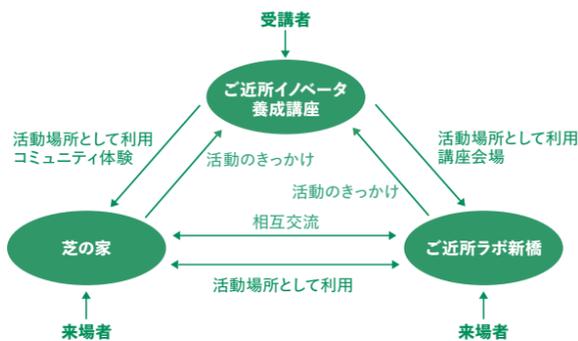
坂倉 仕様書や計画書をつくるというのが行政のやり方ですが、計画せよと言われても、始めてもない段階で、いつ、誰が、どんなことを言ったり、したりするかなんて、わかりません（笑）。互いに学び、話し合いながら少しずつつくっていきました。

山納 そうした時間の中で発見された「誰もがいたいようにいられる場所」をつくる仕組みや仕掛けを、坂倉さんはご著書の中で「しつらえ（空間）」「きりもり（マネジメント）」「くわだて（コンテンツ）」という3つの視点から、わかりやすく解説されています。

たとえば「しつらえ」では、「芝の家」のオープンな雰囲気に、らえ」「きりもり」「くわだて」といったデザイン的な思考が生かされていると感じます（図1）。

坂倉 講座の卒業生に活躍の場がない、ということは珍しくありません。だから場づくりと人づくりを同時に進めるメリットは大きいと思います。特に「ご近所イノベータ養成講座」は何かを教わるだけでなく、20人がつながること自体に大きな意味がある。地域柄、ふだん誰とも会わないのが普通だったりする港区ですが、この講座に参加すると毎日誰かしらと顔を合わせるようになります。

■図1:「芝の家」を含むコミュニティづくりのデザイン



■図2:ミーティングプレイスが点在する尾山台の町の将来像



右/人と人が出会い、新たな創発が生まれる「おやまちプロジェクト」の活動の「場」として、駅前商店街の歩行者天国が果たす役割は大きい。写真・上図提供/東京都市大学コミュニティマネジメント研究室 左/「タタタハウス」の1階は誰もがふらりと立ち寄れる場所。看護師による保健相談、外国人家族も交えた親子サロンなどのイベント開催も頻繁だ。撮影/栗原論

山納 近いことが、ケアし合う関係性をつくる。公共空間により「関係性の近接」をちゃんとつくることとが、ケアをし合うコミュニティの前提になる。マンズリーニも著の『「こちよい近さがまちを変え」(2023年、Xデザイン出版)で、そう書いていますね。

坂倉 今や地球環境もケアしないと生き延びられない時代。それは子どもや高齢者に対しても同じです。たとえばパリの「15分都市」から企業の方まで、さまざまな人が集いプロジェクトを生む場所にもなっています。

山納 やはりコミュニティづくりであり、それが場づくりにもつながっていった、と。

坂倉 コミュニティというと多くの人は町内会や商店街など既存のコミュニティを思い浮かべます。でも今の時代、それが本当に町を代表しているかという疑問もある。コミュニティは所属するものではないのです。これからのコミュニティは、むしろプロジェクトがつくっていく。ある関心事があり協力して何かやらなきゃいけないから、ネットワークをつくりコミュニティが生まれる。「おやまちプロジェクト」は、まさにそういうコミュニティづくりの試みです。

町全体を本当の意味での「居場所」とするために

山納 人とすれ違っても話さないし、カフェで隣に座った人と仲良くなることもない。今の社会を見て、坂倉さんはどんな時代意識をもって活動されていますか？

これからのコミュニティはプロジェクトが起点になる

山納 東京の尾山台周辺地域で進めている「おやまちプロジェクト」についても教えてください。

坂倉 「おやまち」の場合、これまでとは逆のアプローチから生まれました。2015年から同地の東京都市大学で教えることになり、その翌年に駅前商店街の理事である高野雄太さんと知り合いました。ここは毎日夕方4〜6時に歩行者天国になります。そこで何かできないか？ということから商店街にパイプ椅子を並べ、「ホコ天ゼミ」を行ったのが最初です。

いのですね。

坂倉 興味も関心も違う4人が中心となり、商店街でさまざまなイベントやプロジェクトを行いました。すると、近くに住んでいたけれど出会うことがなかった人たちが、「好き」や「やりたい」をきっかけに出会えると、驚くほどいろいろなことが始まるんです。やりたい人と、それを実現できる人がつながるといって、支援のマッチングが起こりやすい。「おやまちプロジェクト」が開催するイベントに行くのと気の合う人ができ、すぐ一緒にやろうと盛り上がりがあります。

山納 そういう地域に根差した新しい関係の中から、ここ「タタタハウス」もつくられたのですか？

坂倉 地域の暮らしの中でさまざまな可能性を探るための「実験場」と考えています。大学で借りているゼミや研究活動のための研究室でもありますが、地域住民からの記事を参照。

*6 イタリアのデザイン研究者。詳細は8頁からの記事を参照。
*7 港区新橋6丁目の公共施設1階にある区民協働スペースを利用した地域づくりの活動拠点。誰もがご近所イノベーション活動を気軽に始めたり、仲間を増やしたりできるような「研究室」や「実験室」として、カフェ機能、コワーキングスペース機能、部活やイベント機能を備えた空間。
*8 都市機能の集約とブロック化により、日常のほとんどの用事を徒歩や自転車ですることのできる都市計画。

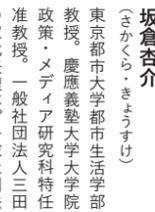
山納 町全体が居場所になっていく、ということですね。よい居場所をつくっても、そこには来られる人しか来ない。当たり前ですが、「場づくり」に関わると、そ

坂倉 実感としても、またアカデミックな研究を見てもよくわからないのですが、ある種の格差が広がっているのではないかと、という危惧はもっています。社会関係資本、あるいは人と人との豊かな関係に触れて育ってきた人と、そうでない人の二極化が進んでいるのではないのでしょうか。

山納 これからの活動の展望も含め、今の世の中にはどんな場づくりが必要か、お聞かせください。

坂倉 ただ居場所をつくり、出会うだけではなく、「町全体がそうやっていく」ことが大切と考えています。商売の場所と考えられていた商店街を私たちが「再定義」したように、図書館も学校も老人ホームも保育園も公園も飲食店もそれぞれの目的を超えた出合いや集いの場、「ミーティングプレイス」として、もつと人々の多彩なアクティビティが重なる場所にしていくはずですね。

山納 町全体が居場所になっていく、ということですね。よい居場所をつくっても、そこには来られる人しか来ない。当たり前ですが、「場づくり」に関わると、そ



坂倉杏介 (さかぐち きょうすけ) 東京都立大学都市生活学部教授、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任准教授、一般社団法人三田の代表理事。一般社団法人おやまちプロジェクト理事。博士(政策・メディア)。



山納洋 (やまのうゝ ひろし) 1993年大阪ガス株式会社。10年より近畿圏部にて地域活性化・社会貢献事業に携わる。一方、カフェ空間のシェア活動「Common cafe」「六甲山カフェ」「トークサロン企画「Talkin' About」などをプロデュース。著書に「Common cafe」(西日本出版社)、「つながるカフェ」(コミュニティの「場」をつくる方法) (学芸出版社) などがある。